

熊谷達也『邂逅の森』

『邂逅の森』は秋田県の阿仁マタギである松橋富治の熊をめぐる話である。東北の自然と厳しい生活、マタギと獣とのかかわりが描かれているとともに、富治をめぐる二人の女性との関係が興味深い。「邂逅」とは偶然出会うことであるが、この小説ではマタギと熊、富治と女性との出会いにかけている。

大正時代のはじめに富治がマタギとして活動した頃、熊は肉だけでなく、毛皮や胆も高値で取引されていた。このほか、アオシンと呼ばれたカモシカも阿仁マタギにとって貴重な収入源だった。猟はもっぱら春におこなわれるが、その理由は雪によって熊やその足跡を見つけやすいこと、山の中を歩きやすいことにあった。まだ冬眠している熊を驚かせて巣穴を出たときに撃ち取る穴熊狩りもおこなわれていた。クマを追い立てて撃つ巻き狩りでは、追い立てるものと待ち受けて撃つものに分かれて、集団で獲物を狙う。富治は狩猟組の頭領である善次郎のもとで腕を磨いていく。

阿仁の沢では、「アメ流し」という毒流し漁もおこなわれていた。毒を流してヤマメ、イワナ、アユやサクラマスを一網打尽にする行事で、男女の出会いの場ともなっている。私もしばしば釣行する阿仁川は、現在でも美しい河川環境が保たれており、淡水魚の宝庫である。アメ流しでは、さぞかし多くの魚が獲れたことだろう。このアメ流しで富治は、文枝というひとりの娘に目を奪われ、手にしたサクラマスを譲ってあげる。文枝は村の有力者である長蔵の娘だった。文枝のことで頭がいっぱいになった富治は、文枝の父が不在の時に夜這いをしかけ成功する。

文枝と恋仲になったものの、文枝が妊娠したことによって、富治は文枝の父の逆鱗にふれることになった。文枝は医者と結婚することになっており、それは荒瀬村にとってとてつもなく重要なことだった。富治は荒瀬村にいられなくなり、文枝と自分の子を残して、阿仁合町の鉾山で働くことになる。このあたり、文枝の心情が描かれていないので、文枝が消極的で自分の意志をもたないように感じてしまうが、のちにそれが誤りであることが明らかになる。富治が阿仁でマタギを続けることは許されなかった。やがて富治は、おそらくは長蔵の差し金によって、さらに遠方にある山形県大泉村の大鳥鉾山に異動することになった。

大鳥鉾山では小太郎という見習い鉾夫の面倒を見ることになった。見習いではあったが、富治より1歳若いだけであり、やくざをしていたこともあり、粗野で乱暴者だった。その小太郎が密かに楽しみにしていたのは狩猟だった。その跡をつけた富治は、熊を狙う小次郎を見つけるが、小次郎の腕前は未熟だった。小太郎の前で熊を仕留めることによって、富治は小太郎の師匠になった。

その鉾山が大雪崩に見舞われ、大勢の死者が出た。たまたま難をまぬがれた富治は、あやうく死ぬところだった小太郎を助けた。二人はこの事故を契機に鉾山で働くことをやめて、八久和にある小太郎の村に行くことになった。その村で受け入れられるためには、みやげが必要である。富治はクマをしとめて、それを背負って小太郎の家を訪ねた。なかなか村で生

活することをみとめてもらえなかった富治だったが、小太郎の姉のイクと所帯をもつことを条件に、住人となることが許された。イクは女郎屋や遊郭で働いたことがあり、富治ともかつて肘折温泉の土産物屋で出会っていた。

富治は頭領として小太郎たちと猟をしながら、イクとの間に娘をもうけ、幸せに暮らしていた。その娘が嫁に出たのち、おもいがけず文枝から手紙が届いた。会ってみると、文枝と富治の子である幸之助が家出したと言う。文枝の夫は医者であったが女遊びが酷く、文枝に暴力をふるうだけでなく、自分の子ではない幸之助を疎んじた。たまたまに家出した幸之助は実の父である富治を訪ねるはずだと思って、文枝はやってきたのだった。ところが、家に帰った富治は幸之助に会えないだけでなく、妻のイクが消えていることに気がついた。

イクは訪ねてきた幸之助と会ったのち、二人で阿仁へ行き、富治の両親に会っていた。イクは八久和での富治一家のことを話し、自分のような女と夫婦になってくれた富治への罪滅ぼしに大金を置いていった。イクは文枝があらわれたことで、身を引く覚悟だった。幸之助はマタギになって富治のもとで修業したいと言った。

富治は必死にイクをさがし、かつて二人が出会った肘折温泉の土産物屋で働いているところを見つける。そのとき富治は「お姉さん、その肘折こけし、俺さもひとつ売ってくれねえかの」「この店で、二十年ばかり前に、こけしば売りつけられそうになったことがあっての。その時は買わねえですまったんだども、どうすても、女房さ買ってやりだぐなあってなあ。わざわざこうすて買いに来たのしゃ」と言った。イクは顔をゆがめ、涙があふれるのを止められなかった。

富治はイクをともなって鶴岡の旅館にもどり、そこでイクと文枝は初めて顔を合わせた。二人は一言も交わすことなく、無言で見つめ合ったのち、互いの頬を張り合った。結局、イクは元のさやに納まり、文枝は医者夫婦の間にもうけた子を育てるために、元の家庭に戻っていった。イクと文枝が対峙するシーンはリアルで感動的である。文枝はイクから富治を奪うつもりはなく、幸之助を富治のもとで修業させることも望まなかった。文枝が無言の張り手でイクに伝えたのは、マタギの女房として富治と添い遂げるのがイクの務めだ、ということだった。文枝は芯の強い女だった。

さらに、この物語りのフィナーレは、富治が山の主である大グマと闘うシーンとなっているが、その壮絶な描写と結末には驚嘆させられた。全体として、東北の貧困の中で、獲物を捕りすぎないようにクマやカモシカと共生するマタギの生活は尊敬せざるをえないものである。小グマや大グマを獲らないこと、獲物が減ってしまったら別の山に旅マタギに行くことなどは、長い間クマと共存するうえで欠かせないことだった。

現在、マタギと呼ばれる専門猟師はほとんどおらず、カモシカは天然記念物となって捕獲できなくなっている。鹿や熊は増えており、農業被害が増えているだけでなく、熊による人身被害が社会問題になっている。かつて高価に売買された熊も、いまでは人気がなく、駆除された熊の多くが焼却処分されている。苦労して熊を獲っても売れなくなっているため、専門猟師は減っている。この現状を富治はどう思うだろうか。

もう一つ印象的だったのは、東北各地の温泉や鉱山がその地域の活力の源になっている点であり、湯治に訪れる客のための旅館や土産物屋で賑わう様子が、随所に描かれている。イタが働いていたのも、そういう場所だった。私はかつて阿仁合（阿仁銀山）の宮越旅館に泊まったことがあるが、心温まる郷土料理で癒された記憶がある。阿仁比立内の松橋旅館は、『第十四世マタギ 松橋時幸一代記』の系譜をつぐものであり、熊の毛皮がいくつも展示されていた。歴史と文化の重みをずっしりと感じる事ができる旅館だった。甲斐崎圭による『第十四世マタギ 松橋時幸一代記』は、1989年に刊行され、『邂逅の森』を執筆するうえで参考になっている。

阿仁は現在、温泉やマタギ文化に加えて、アユ釣りの名所として輝きをはなっている。これほど川が美しく、水がきれいで、アユが豊富な川は、他にほとんど見当たらない。それでいて釣り人は過密でなく、のんびり楽しむことができる。阿仁川だけでなく、米代川の本支流も美しく、魚の宝庫になっている。かつて、アユ釣り文化に大いに貢献した古川トンボが最後に住み着いて釣りを楽しんだのも、米代川だった。自然と人間が調和をもって生きている「別世界」が残されているような気がしてならない。『邂逅の森』は高校教師をしていた著者が十分に準備して推敲を重ねた傑作であり、直木賞受賞という以上の名著である。

熊谷達也（2006）文春文庫

片野修